

セルフジャッジ進行の順守とコーチングはルール違反

最近のグリーンボールマッチ練習会で、スコアへの干渉や、目配せ・ジェスチャー・声かけなどのコーチングが行われていると報告があります。くれぐれも、ルール違反にならない様をお願いいたします。

そして、私たち大人は次世代に「スポーツマンシップ」を伝える役割を担っていると考えています。

2003年とかなり前にはなりますが、テニスコーチはじめとするスポーツ指導者向けに日本体育協会が発行している「スポーツジャーナル」誌から「スポーツマンシップと勝敗」という一文を以下に引用しました。「勝つ」ということ、何に対する「リスペクト」なのか、ジュニアへのサポートとは何かを考える一助になればと思います。

以下引用 「スポーツマンシップと勝敗」 スポーツジャーナル 2003年5・6月合併号より

【独立行政法人 経済産業研究所 広瀬一郎著】

「宣誓！我々はスポーツマンシップに則って、正々堂々闘うことを誓います！」とは高校野球を始め、青少年のスポーツの場面でお馴染みの言葉である。

しかし、「スポーツマンシップ」の意味を問われると、ほとんどの方は口ごもるに違いない。

もっとも、スポーツの場で何度も繰り返されている以上、スポーツをやる上で守らなければならない重要なものであり、「体力の強弱」や「技術の巧拙」と言った物理的なものではなく、精神的な価値に関することである事は理解される。

では、「スポーツマンシップ」とは一体何なのだろうか？

「スポーツマンシップ」をスポーツマンらしい振る舞いとするならば、「スポーツマン」の元々の意味である「Good Fellow=いい仲間」に表現される、何らかの人間の内的規範、倫理的側面であると思われる。

言うまでもなく、スポーツにおいて「勝つ」事は第一の目的である。そこには自ずと「勝つことに意味があることである」という前提が存在し、意味のない「勝ち」にこだわる事はそれこそ本当の意味で無意味なのだ。

「新体育学講座第14巻」(昭和38年出版)から、「スポーツマンシップ」とは「尊重(respect)」する心であるという。尊重とは「理解」し「判断」し、その「価値」を認めることである。「同意」は必ずしも必要としない。立場の違いを理解し、その上で価値を認める事が尊重することなのである。

スポーツにおける尊重の対象は、以下の3つである。

＜①対戦相手 ②審判 ③ルール＞

ルールを尊重せずに反則して勝つことに意味はあるのだろうか？ 何らかのアンフェアなことが理由で、やる気を喪失した相手に勝って「楽しい」だろうか？

しかし、日本では「尊重(respect)する心」が知られていたのに理解の促進を怠ってきた。

ここでは、そのような指導に抜かりのないアメリカの例から学ぼう。米国サッカー協会発行の「ジュニアのためのサッカークリニック」という本の中に、ゲーム中に交代させられた選手が「まだ出来るのに！」とふてくされた態度を取る事があるがコーチはこれを絶対許してはいけない、と書いてあります。

これを、日本的に解釈すると「フォーザチーム(チームのために)」とか「監督の指示に従わなければいけないから」とか説明されるだろう。

しかし、交代で入る選手への**尊重(思いやり)を欠いた態度**が「**スポーツマンシップにもとる**」と、理由を説明して注意せよと明記されているのである。交代を言われたら次に交代で入る仲間に「頑張れよ」と励ますこと、これが「仲間への尊重」なのである。

ある人が真にスポーツマンであるかどうかは、究極的には勝負に負けた時の態度でわかる。なぜなら「勝ち」が至上の目的だからだ。負けた時に素直に負けを認め、それでいて頭を垂れず、相手を称え、意気消沈せず、すぐ次に備える人が真のスポーツマンだ。なるほど、それが Good Looser であるならば、確かにその人は信頼できる Good Fellow(いい仲間)に違いない。

欧米では、スポーツ時のみでなく「スポーツマンシップ」的規範は、生活のあらゆる面で規範が問われる時、頻繁に引用されると言う。

そのためには、スポーツの場で「スポーツマンシップ」という言葉を頻繁に使う事が必要だろう。

(以上)